



踊姿絵 羽根のかむろ 田井耕耘 (1865-1936)

2. 田井耕耘筆《踊姿絵》シリーズについて

踊姿絵 羽根のかむろ (図版Ⅱ) 田井耕耘 (1865-1936) 明治32年 (1899) 34歳

木版多色刷 1枚 法量32.9×21.2cm

款記「耕耘」

印章「耕耘」(朱文方印)

出版年と版元名「明治卅二年一月十日印刷全年全月十五日発行

印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉」

田井耕耘(たい こううん、1865-1936)について、その名を知る人はほとんどいないのではないだろうか。耕耘は、明治時代に日本画家として活躍した人物である。耕耘について最も知られているのが、新聞や小説の挿絵から肉筆画に至るまで幅広く活躍した尾形月耕(1859-1920)の弟子であり、後に月耕と結婚をしたことであろう。月耕は、かつては「大家」とも呼ばれた人物であるが、これまであまり注目されてきていなかったが、近年になり『尾形月耕展-花と美人と歴史浪漫-展』(那珂川町馬頭広重美術館、2018年)が開催されるなど、少しずつ注目され始めている¹。しかし、弟子やその周辺の人物ともなると、まだまだ知られていないのが現状であろう。そのため本論では、まず耕耘について月耕の先行研究²などから判明していることを述べ、その後《踊姿絵》シリーズについて、版元との関係を含め、その特徴について見ていきたい。

1. 田井耕耘について

田井耕耘は、慶應元年(1865)9月15日に紀州家御典医・田井俊斎と母なつの中に次女として生まれる。本名を起く、俗名は喜久(子)といい、月耕の弟子となってからは耕耘と号した。尾形月耕の弥左衛門時代(当時、江戸京橋弥左衛門町に住んでいたことから)と呼ばれる明治15-19年(1882-86)の弟子と伝えられている。明治21年(1888)、月耕は先妻とよと離婚し、耕耘と結婚、田井家の婿養子となる。月耕の作品には、「田井」を使用したものが見られるが、これは月耕が田井姓を嗣いだことによる³。同年には長男の正子(尾形月山、1887-1967)、明治30年(1897)には長女の玉子(玉耕)を生んでいる。昭和11年(1936)11月3日、71歳で没する。墓は月耕と息子の月山とともに、雑司ヶ谷霊園にある⁴。

長男の尾形月山は、父・月耕に絵の手ほどきを受けており、早くからその頭角を現した人物である。日露戦争の時には、従軍画家として戦地へ赴き、戦争画を描いていた。特に、写実的な表現を駆使した歴史画を得意とした⁵。また長女・玉子も「尾形玉耕」という名で活動をしていたようであるが、彼女については、ほとんど知ることができなかった。唯一、確認できたのが「大正九年度帝国絵画番付」(東京文化財研究所蔵⁶)で、「独立大家」の部に名前が見える。また、月山の息子も「尾形礼正」の名で「曾我物語」や「竹取物語」などの歴史画を描いており、3代にわたって画家として活動をしていたことが判明している。以上が、耕耘について、これまでの資料を基に判明している事である。

2. 《踊姿絵》シリーズの特徴

次に、耕耘の唯一確認できる錦絵作品《踊姿絵》シリーズについて当館所蔵の「羽根のかむろ」(図版Ⅱ)を例に見ていく。本シリーズは、歌舞伎や浄瑠璃の一場面を描いた作品で、現在確認できたもので14点(【表1】参照)ある。「羽根のかむろ」は、歌舞伎謡曲『春昔由縁英』を描いたものである。これは、初春の吉原で松飾りのある門口で、無邪気に羽根つきをして遊ぶ禿の姿を描いたものである。絵の左欄には、「明治卅二年一月十日印刷全年全月十五日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉」(挿図1)とあり、出版年と版元名が記載されている。本シリーズの他の作品の制作年代も、明治32年(1899)1月~5月の間に制作されている。【表1】に、それぞれの出版年と版元名を記載したので参照されたい。「羽根のかむろ」の画面上

部には題枠があり、シリーズ名「踊姿絵」の後に副題である「羽根のかむろ」が記載されている。落款は「耕耘」、印章は朱文方印の「耕耘」（「源太」と「種蒔三種」のみ異なる印を使用している）である（挿図2）。

次に「羽根のかむろ」を中心に、《踊姿絵》シリーズの特徴について見ていきたい。「羽根のかむろ」では、振袖の袖をそっと片手で押さえながら羽根つきをしている禿を、愛らしい姿で描いている。背景に描かれた門口に置かれた松飾りは、禿よりもぼかしたような柔らかなトーンで表しており、画面に奥行きを出している。禿の着ている着物を見ると、熨斗模様が描かれており、初春に相応しいお目出度い意匠となっている。この熨斗模様を見ると、部分的に雲母が用いられている。また、半襟や帯締めの部分には空摺が用いられており、さらに題枠にも空摺で筐模様が描かれている。他の《踊姿絵》シリーズでも、例えば源氏の武将・梶原源太を郭通いの美男子に仕立てた『倭仮名色七文字』を描いた「源太」では、梶原源太の着物の帯に描かれた亀甲模様に雲母が用いられている。また、祇園で喜撰法師が茶汲女と戯れる姿を描いた『六歌仙容彩春』の一場面を描いた「喜撰」では、喜撰の着物に直線で描かれた幾何学模様を空摺で表現している。この他の作品にも、雲母や空摺が随所に使われており、まさに贅を尽くした作品に仕上がっている。

しかし本シリーズで最も特徴的なのが、筆彩色で描いたような筆致表現が見られることであろう。「羽根のかむろ」を見ると、禿の着物の帯には筆の掠れの表現が見られる。また、背景の門松の下部分の筵には、筆で塗ったような濃淡の描き方をしている。この他にも「源太」の背景の梅の枝の描き方や「関兵衛」（挿図3）に描かれた木の幹の濃淡の付け方など、本シリーズには筆彩色のような筆致表現が多く見られる。また「羽根のかむろ」を含め本シリーズが、淡い色を用い背景をぼかしている点も見逃せない。このような表現はいずれも、江戸時代までの浮世絵には見られないものである。これらのことから本シリーズは、筆で描いたような複雑な表現を木版画で表現しようとした作品と言える。こうした表現は、月耕作品にも見られることから、月耕からの影響があったと思われる。しかし、それ以外に、版元・松木平吉の存在も大きかったのではないかと考えられる。次に、松木平吉（以下、大平と略）について、月耕との関わりを含めて見ていく。

3、版元・松木平吉との関係について

耕耘の《踊姿絵》は大平から出版されているが、注目すべきは月耕とも関わりの深かったことである。月耕は明治20年代以降に錦絵作品を盛んに制作し始めているが、その内の主な作品で大平による出版として以下のものが挙げられる。

- ・《教導立志基》シリーズ（小林清親、蜂須賀国明、豊原国周、井上探景、月岡芳年、揚州周延との共作）
明治16-22年（188-99）作
- ・《月耕随筆》シリーズ（はじめ武川利三郎、のちに松木平吉） 明治24-28年（1891-95）作
- ・《義士四十七士図》シリーズ（はじめ武川利三郎、のちに松木平吉） 明治28-32年（1895-99）作
- ・《花美人名所合》シリーズ 明治28-29年（1891-92）作
- ・《婦人風俗尽》シリーズ 明治31年（1898）作

月耕作品の中で評価の高い作品の一つ《花美人名所合》シリーズを出すなど、月耕の錦絵作品には欠かせない人物であったことが伺える。また、この他にも大平は、月耕の弟子・月岡耕漁（1869-1927）の代表作《能楽図絵》シリーズ（明治30-35年 [1897-1902] 作）と《能楽百番》シリーズ（大正11年 [1922] 作）を出しており、さらに息子の尾形月山の日露戦争を題材とした《工兵第四大隊金州城門破壊の図》（明治37年 [1904]、恵俊彦コレクション蔵）なども出している。こうしたことから大平は、月耕を中心に、その周辺と関わりのあった版元と考えられる。

大平は、安永期（1772-81）から昭和5年（1930）まで開業していた老舗の版元である。大平の名が知られるようになるのは、明治期に小林清親によって出された「光線画」と呼ばれる作品からである⁷。当時、明治という近代化に進む時代の中で、写真や石版画などの台頭により錦絵は衰退し始めていた。清親の「光線画」は、

錦絵に新たな工夫を盛り込んで対抗した意欲的な作品として、今日でも高く評価されている。

清親の「光線画」以降も、大平はそれまでの浮世絵には見られない趣向で、版画制作に挑んでいる。特に注目されるのは、水野年方や河鍋暁翠など日本画も描いている、浮世絵を専門としない画家を起用していることである。月耕は、大平による版画を制作し始めたのとほぼ同時期に、日本画の制作も盛んに行なっている。現在作品の行方は不明ながら、耕耘も明治20年代以降から美術院に作品を出品していることが確認できる⁸。日本画を制作する傍らで《踊姿絵》シリーズを大平から出版しており、まさに明治20年代以降の月耕の活動と重なる。

さらに、「羽根のかむろ」に見られた筆彩色のような筆致表現は、月耕の作品にも見受けられることは先述した。実際月耕は、摺師に色摺り見本を渡す際、墨摺りした版画に肉筆で彩色し、さらに色やほかしの調子を細かく指示していたという⁹。月耕の《花美人所合》や《美人花競》などは、その代表例として挙げられるであろう。さらに、弟子の月岡耕漁が大平から出版した《能楽図絵》と《能楽百番》においても、筆彩色の筆致表現やほかしを多様していることが指摘されている¹⁰。また《能楽図絵》では、雲母や空摺を使用しており、こうした点でも耕耘作品の特徴と共通する。さらに、月耕周辺だけではなく、月岡芳年の弟子である水野年方の錦絵作品でも、筆彩色のような掠れや濃淡の表現、淡い色のほかしなどの特徴が見られることが指摘されている¹¹。年方の作品に、こうした表現が見られるようになるのが、版元・武川利三郎から出版された明治24-26年(1891-93)作の《三十六佳撰》シリーズからであり¹²、月耕とほぼ同時期である。明治20年代頃は、再び錦絵が衰退し始めた時期であり、月耕や耕耘の作品は大平や武川利三郎を始めとした当時の版元が新たな表現を試みたことによって生まれた作品といえるであろう。

4、おわりに 一月耕との比較を通して

耕耘の特徴は、月耕を始め時代の好みに合わせたものであった。最後に、耕耘の《躍姿絵 関兵衛》(挿図3)と月耕の《月耕随筆》シリーズから「関の戸」(挿図4)とを比較することで、月耕との違いを見たい。耕耘の「関兵衛」は、謡曲『積恋雪関扉』を題材にしたものである。これは、関兵衛に扮した大伴黒主が、野望の成就祈願に使う護摩木とするため、小町桜を切り倒そうとするが、小町桜の精となった遊女・薄墨が現れ激しく争う、というものである。耕耘の「関兵衛」は、まさに大伴黒主が木を切り倒そうとする瞬間、小町桜から薄墨が現れる場面を描いている。これと同じ場面を描いた月耕作品が、《月耕随筆》の「関の戸」である。両者を比較してみると、耕耘の大伴黒主は足をふんばり、絵の枠から飛び出る程の大斧を今まさに小町桜に向かって振りかざそうとしており、動きのある画面として描いている。一方月耕の大伴黒主は、斧の柄に肘をつき、薄墨の精を静かに見やる姿で描いている。同じ主題を描いていても、対照的な描き方をしていることがわかる。また薄墨の描写を、月耕は幽霊などを描く際の常套手段である足を描かないことで、薄墨がこの世のものでない存在であることを示している。それに対し耕耘は、木の間から現れた薄墨をシルエットのみで描いており、より強く実態のない存在として描き出しており、さらにこれから始まる不穏な空気をも表現している。

今回は、月耕との違いが明確に見られる作品と比較したが、以上の比較からだけでも、耕耘が月耕の影響を受けながら、独自の画法を確立していたことが分かる。

以上、田井耕耘について、伝記・作品について見てきた。今回耕耘については、《踊姿絵》シリーズ以外の作品を見ることができなかったため、その画歴や特徴を掴むのは難しかった。そうした中で、月耕を始め錦絵が衰退し始めたその当時に、松木平吉による新たな錦絵制作の挑戦に耕耘も挑んでいたことが判明した。さらに、その絵は、決して月耕に見劣りする作品ではないことが、作品比較から判明した。今後も月耕や同時代作品とも比較して見ていくことで、より耕耘の特徴が見えてくると考える。

(実践女子大学香雪記念資料館 事務職員 塚本園子)

註

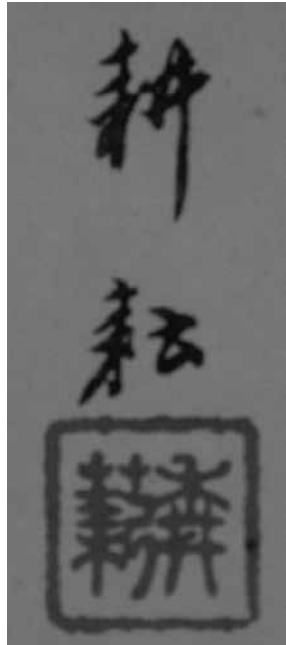
- 1 尾形月耕の主な先行研究として以下の資料を挙げる。
 - 1、野本淳「京橋に生まれた画家－尾形月耕」『郷土資料館だより』第51号、東京都中央区立築地社会教育会館郷土資料館、1997年
 - 2、岩切信一郎「尾形月耕－明治十年代から二十年代の活動を中心に－」『浮世絵芸術』第144号、国際浮世絵学会、2002年
 - 3、『Bien』第45号、藝術出版社、2007年
 - 4、堀川浩之「尾形月耕幻のデビュー作『征韓論』は、名鏡斎季邑筆『建白御評議之図』か？」『浮世絵芸術』第165号、国際浮世絵学会、2013年
- 2 前掲註1参照
- 3 月耕作品の「田井」姓使用に関しては、前掲註1の2 (p12-13) 及び4 (p38) で言及されている。
- 4 月耕の墓誌には以下のような表記がされている。
「尾形月耕 大正九年十月一日 歿／妻 喜久 昭和十一年十一月三日 歿／尾形月山 彩雲院月山暁居士 行年八十一歳 昭和四十一年十二月二十七日 歿／尾形梅代 静雲院梅香日妙大姉 平成四年九月十八日 行年八十三歳」
- 5 尾形月山については、『日本美術院百年史 二巻 上 [図版編]』（日本美術院百年史編集室、1990年）、恵俊彦「残照の中の浮世絵師達」（『浮世絵芸術』第144号、2002年）などを参照。
- 6 東京文化財研究所データベース参照（URL：<http://www.tobunken.go.jp/materials/banduke/807066.html>）。なお、月耕と月山も番付に名前があり、いずれも「東京之部文展作家」の部に記載されている。
- 7 3代目と5代目は「大黒屋平吉」と名乗っていた。清親の「光線画」を出したのは4代目で、明治24年（1891）に没した後は5代目が後を継いでいる。耕耘の作品を出したのは、5代目となる。
- 8 『日本美術院百年史』（日本美術院百年史編集室、1989-2004年）に、以下の耕耘作品が記載されている。
 - ・明治24（1891）11月21日-23日の「日本青年絵画協会 臨時研究会」に「今様処女」を出品し五等褒状
 - ・明治33年（1900）4月1日-30日の「第8回日本絵画協会 第3回日本美術院 連合絵画共進会」に「恋無情」を出品し二等褒状
 - ・明治33年10月25日-12月8日の「第3回日本美術院 連合絵画共進会」に「砧」を出品し三等褒状
 この内、明治33年の「第8回日本絵画協会 第3回日本美術院 連合絵画共進会」と「第9回日本絵画協会 第3回日本美術院 連合絵画共進会」には、月耕と長男・月山も作品を出品している。
- 9 前掲註1の1 (p3) 参照
- 10 『近代の能画家 月岡耕漁展』城西国際大学水田美術館、2005年
- 11 日野原健司「水野年方の画業～浮世絵版画の制作を中心に」（『太田記念美術館紀要 浮世絵研究第7号』、2017年）において、月岡芳年の作品と比較することで、より詳しく年方作品の特徴が論じられている。
- 12 前掲註11参照

【表1】田井耕耘 《踊姿絵》シリーズ作品一覧

	題名	落款	印章	出版年と版元名
1	踊姿絵 羽根のかむろ	耕耘	耕耘	明治卅二年一月十日印刷全年全月十五日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
2	踊姿絵 源太	耕耘	□	明治卅二年一月十日印刷全年全月十五日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
3	踊姿絵 種蒔三番	耕耘	□	明治卅二年一月十日印刷全年全月十五日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
4	踊姿絵 草摺引	耕耘	耕耘	明治卅二年一月十日印刷全年全月十五日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
5	踊姿絵 常磐	耕耘	耕耘	明治卅二年一月十日印刷全年全月（十五）日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
6	踊姿絵 橋弁慶	耕耘	耕耘	明治卅二年一月十日印刷全年全月十五日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
7	踊姿絵 うつほ	耕耘	耕耘	明治卅二年二月七日印刷全年全月一日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
8	踊姿絵 酒屋の御用	耕耘	耕耘	明治卅二年二月（七）日印刷全年全月一日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
9	踊姿絵 山姥	耕耘	耕耘	明治卅二年（二）月（七）日印刷全年全月一日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
10	踊姿絵 喜撰	耕耘	耕耘	明治卅二年四月十日印刷全年全月廿日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
11	踊姿絵 汐波	耕耘	耕耘	明治卅二年四月十日印刷全年全月廿日発行 印刷兼発行者東京日本橋区吉川町二番地 松木平吉
12	踊姿絵 松魚売	耕耘	耕耘	明治卅二年五月十日印刷全年全月十五日発行 印刷兼発行者日本橋区吉川町二番地 松木平吉
13	踊姿絵 朝妻	耕耘	耕耘	明治卅二年五月十日印刷全年全月十五日発行 印刷兼発行者日本橋区吉川町二番地 松木平吉
14	踊姿絵 関兵衛	耕耘	耕耘	明治卅二年五月十日印刷全年全月十五日発行 印刷兼発行者日本橋区吉川町二番地 松木平吉

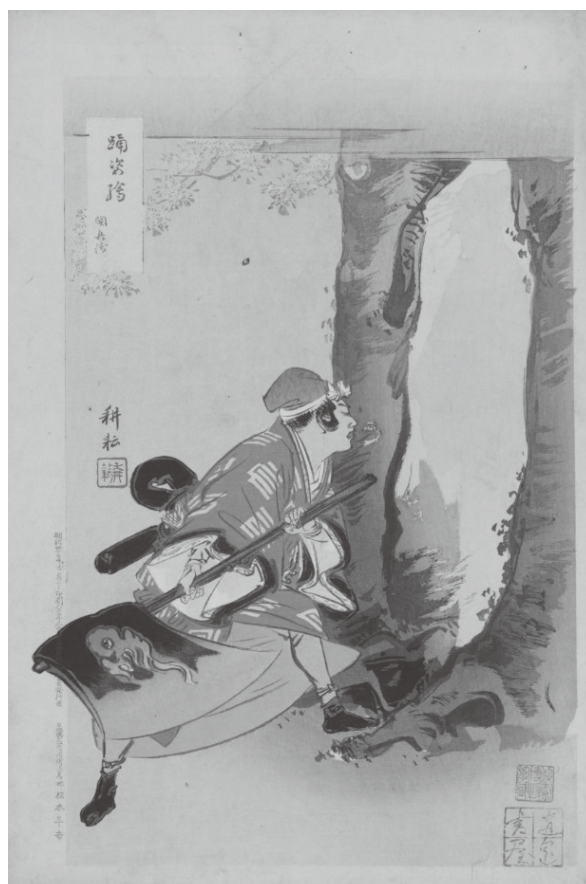
※本表は、田井耕耘の《踊姿絵》シリーズを制作年順に記したものである。出版年と版元名の内、明確に読み取れなかった部分は（ ）で記した。

明治卅二年一月十日印刷全奉公員五、發行所、東京、本郷區、吉川町、三平地、松本平土。



挿図2 田井耕耘
《踊姿絵 羽根のかむろ》
落款と印章

挿図1 田井耕耘
《踊姿絵 羽根のかむろ》
出版年と版元名



挿図3 田井耕耘
《踊姿絵 関兵衛》
早稲田大学演劇博物館蔵
(資料番号012-0950)



挿図4 尾形月耕
《月耕随筆 関の戸》
那珂川町馬頭広重美術館蔵